

株式会社インタラクティブィ 番組審議委員会議事録

1. 開催日時： 平成 30 年 6 月 15 日（金） 13 時 00 分～14 時 30 分

2. 開催場所： 株式会社ジュピターテレコム会議室 3 階 Room1 会議室

3. 委員の出席：

委員総数： 7 名

出席委員数： 7 名

出席委員の氏名：

（敬称略、五十音順）

植田益朗、音好宏、片山哲郎、砂川浩慶、中川幸美、村上憲一、吉岡忍

放送事業者側出席者：

株式会社ジュピターテレコム

上席執行役員 メディア事業部門長 村山 直樹

株式会社インタラクティブィ

代表取締役社長 長谷 一郎

エーアンドイーネットワークスジャパン合同会社 <ヒストリーチャンネル>

ゼネラルマネージャー ジョン・フラナガン

編成制作部 ディレクター 福井 靖典

ジュピターエンタテインメント株式会社 <女性チャンネル ♪LaLa TV>

代表取締役社長 寺嶋 博礼

LaLa TV 部部長 森 綾

LaLa TV 部編成・制作チーム長 荒木 慶太

事務局：

株式会社ジュピターテレコム

DTH 営業部 高木 明夫、細江 央輝、森井 健策、田口 聖美

4. 議題

株式会社インタラクティブィで放送する 6 チャンネルの内、「ヒストリーチャンネル」、「女性チャンネル ♪LaLa TV」の番組内容、編成内容について。

5. 審議内容

①「ヒストリーチャンネル」の編成及びオリジナル番組『ザ・バイオグラフィー コシノジュンコ Part1』について、各委員より以下のような意見・質問がなされた。

- ・ファッションが、時代や文化とどう絡み合っ生まれてきたのかをとても簡潔に伝えていた。
- ・長いインタビューをしたのち、部分部分を切り出して編集でつないでいく。その編集の手法が日本らしくなく面白い。日本のドキュメンタリーはインタビューの文脈を伝えようとする。同じパターンで見慣れてきてしまった。この手法はある意味、文脈を無視しているともいえるので注意が必要ではあるが、この手法で地上波に影響を及ぼすくらいまでいってほしい。
- ・色調がオリジナリティーをだしてよかった。
- ・ヒストリーチャンネルのオリジナルティを出すために、番組のコンセプトなど一通貫させる必要がある。ヒストリーチャンネル、もしくは「ザ・バイオグラフィー」のロゴを画面に常時だしてもよかった。
- ・日本版のアーカイブを作っていたら、よい企画になる。ぜひ継続的にやってほしい
- ・コシノさんはその世界を極めていて、業界を仕切ってライバルさえも認められている方。わかってはいても、彼女の作品の世界や幅広いクリエイターとしての面をしっかりと伝えたいのでインタビューにもっていく構成が適切だったのではないかな。
- ・「だんじり祭り」に関する部分は、内容が薄かった。どのように影響を与えたのかなど深堀をしないのであれば、あの部分はなくても良かった。それより、お母さまと3姉妹の呉服店の部分を深堀したほうが、より番組に説得力がでたのではないかな。
- ・日本の制作人は、視聴者が興味を持つものは何かを考え、キーワードに沿って喜怒哀楽をもってストーリーを作っていく。本作では「変わらない」というキーワードが最後に出てはきたが、いまいち腑に落ちなかった。喜怒哀楽をもたせたほうが日本人には思い出に残る番組になったのでは。
- ・個人的にはコシノさんの知らない側面が見られて楽しく拝見したが、彼女のすごさは正直伝わってこなかった。世界で活躍している方なので、海外の人が称賛しているインタビューシーンなどが入ったほうが印象に残ったかもしれない。
- ・日本人の目線からあえて海外の人物を取り上げてもいいかもしれない。海外に展開したときも、日本発の面白い番組ができるのでは。
- ・なぜ第1回目がコシノさんだったのかは疑問があった。
- ・成功部分だけでなく、もっと失敗や挫折、苦勞したかを語らせたほうがよかったのではないかな。
- ・コシノさんの半生を年表で入れてもよかった。

<事業者回答>

- ・Part1、Part2 とあり、Part1 が過去を伝える、Part2 が現在と未来を伝えている。歴史を見せるだけでなく、過去を知ること未来に繋げていくというコンセプトで“人”を切り口に展開

していく第1作目。

- 世界に展開していくことも視野にいれて制作をした。
- 第1回目をコシノさんにしたのは、オリンピック委員会にも名を連ね、ファッションだけでなく日本の文化を海外に発信している方である。我々も日本のカルチャーを世界に出していきたい。直接お会いした際に双方意見が合致した。世界を経験していることもあり知名度も十分であると判断した。
- 今後もインタビュー手法など、我々でしかできないチャレンジしていきたい。

②「女性チャンネル♪LaLa TV」の編成及びオリジナル番組『独占インタビュー池田理代子 ~LaLa TV♪Dear WOMAN~』について、各委員より以下のような意見・質問がなされた。

- 番宣番組であり、視聴者層が「ベルバラ世代」の有閑マダムたちと考えると良いが、インタビュー番組単体としては内容が薄く感じてしまった。
- 番宣番組であり、尺も短かったので、少し物足りなかった。インタビューで15分は中途半端に終わってしまう。15分はもったいない。普通でいけば1時間はいける。
- ナレーションの表現も緩く、ぼやけていて、メリハリがなかった。インタビュー番組としての良さが生きておらず、入りづらかった。
- 番宣番組としてだったら大成功。実際に特集を見たくもなった。しかし、“Dear WOMAN”というコンセプトのうえで作られているのだったら、狙いは伝わってこそ、物足りない。“池田理代子”ではなく“ベルバラ”しか印象に残らなかった。
- 業界を極めた人、誰もが納得できる人、話に説得力がある人、作品の評価以上に人柄に魅力がある人、そのすべてが一致するとインタビュー番組としてうまくいくが、なかなか一致しない。しかし、本番組では池田理代子さんが気取らず自然体で、とても印象に残った。思っていた人柄とは違い、とても魅力的に映った。
- まず作品の魅力を伝えてインタビューで取り上げる説得力を持たせ、引っ張っていくべきだった。導入、掴みが足りない。
- 視聴者がどのくらい池田さんをご存知なのかが大切なポイント。予備知識をもっているか、初めて触れるなのか、ターゲットをどこに置くかは難しい。そうなのであれば、コア層（深いインタビュー）ライト層（浅いインタビュー）と2パターンあってもよいかもしれない。
- インタビュアーはいなかったが、話す相手がいたほうが良い。LaLaとして誰かを立てて、シリーズ化しても良いのでは？
- 視聴者が見るのだから、“池田先生”ではなく“池田さん”が適切だった。
- 冒頭で番宣番組であることが分かった。番宣ということを見せないようにする工夫が必要。
- 1つ1つの質問に対し、もう少ししつこく聞いても良かったのでは。池田さんにとっても礼を欠かない。実際にベルサイユにもいったはず。はたまた行っていなかったら、それはそれで面

白い。例えばそこを突っ込んでいくなど。その落差が番組の深さになっていく。

- “Dear WOMAN” という企画であり、“独占インタビュー” であるからには、他では聞けなかったことがあるかと期待したが、聞いたことがあるものが多かった。
- 企画は確立したほうがよい。“Dear WOMAN” なのか、ベルバラ特集の番宣なのか、どちらに向かっているのかが分かりづらかった。

<事業者回答>

- 「ベルサイユのばら」の特集は1年前も実施しており、説明を端折ってしまっていたことを、審議を聞くことで気づけた。
- “Dear WOMAN” という企画自体も、ご指摘の通り、企画が練れていなかったことも事実。“Dear WOMAN” と冠をつけるからには、もっと深い質問インタビューをすべきだった。
- 今後はさらに企画を練り、一般の人など、身近の人にもスポットをあてていこうと考えている。

以上